華南研究の一動向

——「商人与地方文化」研討会（Conference on "Merchants and Local Culture"）に参加して——

帆　刈　浩　之

はじめに

1994年8月，香港科技大学（The Hong Kong University of Science and Technology．以下，HKUSTと略す）で開かれた「商人与地方文化」研討会（香港科技大学人文学部主催，華南地域社会研討会共催）に参加する機会を得た。これは同大学の「華南歴史文化プログラム」による3回目の会議であり，1回目は1993年1月に「民間文献与華南地域社会」というテーマで，2回目は1994年4月に「檔案与華南研究」というテーマで開催されている。こうした一連のプロジェクトを担っている華南地域社会研討会という組織は，1980年香港中文大学人類学系の研究グループと当時同大学歴史系に在籍していたDavid Faure氏を中心とするグループによって組織された人類学研討会にその源流がある。そこには香港郷村社会に関心を持つ研究者たちが集い，断続的に活動が続けられたが1984年に解散する。その後，1988年にDavid Faure氏・梁礎安氏・蔡志祥氏ら，香港・社会史・人類学に関心を持つ研究者によって華南地域社会研討会の組織化が進められたという[1)]。

HKUSTの「華南歴史文化プログラム」の焦点は，香港・マカオを含む福建・広東の文化・歴史・政治経済の研究に置かれているが，さらに両省からの移民や故郷－移民関係といったテーマも含まれている[2)]。これまでの会議内容から窺えるのであるが，華南地域社会研討会に見ら

れる研究方法の特徴としては，①族譜・遺書・契約文書・民歌・故事・劇本・商業帳簿・ギルド史料などの民間文献の重視，②そのための，フィールドワークの積極的利用，という２点が指摘できる。華南という地域に対する理解を深めるために学際的アプローチ，とりわけ歴史学・人類学の対話に重点が置かれている。

今回の「商人与地方文化」というテーマも以上のような関心にもとづいて設定されている。官側史料のみに依拠した研究の場合，中国における商人の社会的地位は低く評価されやすく，実態からかけ離れてしまう恐れがある。それは，これまでの多くの商人・商業研究で歴代政府の商業政策の変遷という点に重心が置かれ，商業活動の担い手の側からの対応や組織自体に関する具体的な研究が乏しかったことからも窺える。ディシプリン相互間の垣根を如何にして低くするかという点も重要な課題である。歴史家は主として明・清・民国期の政府と商人との関係を研究してきており，また，社会学者は企業の商業活動自体を主たる分析対象とした。さらに，現状分析の専門家は1980年代以降の中国経済発展を説明しようとしてきた。これらを総合化する試みは容易ではないが，不断の対話こそが華南地域へのより深い理解の助けとなるであろう。そこで，今回の会議の目的は，中国人の商業活動やその背景となる文化的基盤の長期持続性に対する一層の理解を深めるという点に置かれたのである。会議終了後，１週間のワークショップが用意され，歴史的商業地域（福建省莆田・泉州，広東省澄海県隆都・樟林）への見学旅行，および会議で扱われた問題についての討論によって，参加者の関心と理解を深化するものとなった（後述）。

１．「商人与地方文化」研討会

さて，会議の内容は以下の通りである。

★８月８日

講演「明清商人与城鎮社会変遷」　徐泓

○セッション１　創造生意（Creating Business）

Lai Chi-kong（黎志剛）“The speculative tradition of Heung Shan merchants”

廖迪生「商業社区：香港新界一移民社区的建立」

Mak Hung-fei（麦鴻輝）“Peasant entrepreneur and state institutions in 1990s: cases in Pearl River Delta”

○セッション２　超越郷土（Networking: beyond the local communities）

邱仲麟「清代天津商人与社会慈善」

帆刈浩之「寧波商人的運棺網与雇傭網」

邱澎生「商人如何成為一個団体：試論清代蘇州商幇・会館・公所的組織文化」

Joseph Bosco “Township business network and local culture in Taiwan”

○セッション３　東南亜的華僑（Chinese merchants in Southeast Asia）

Edgar Wickberg “Hokkien merchant society in Manila since 1945”

Qian Jiang（銭江）“Merchants and sojorning communities:the Hokkiens in Java during the 17th and 18th centuries”

★８月９日

○セッション４　南中国的女性形象：声音与緘黙（Images of women in South China: voices and silences）

David Faure “Images of mother: the place of women in south China”

劉志偉「女性形象的重塑：「姑嫂墳」及其伝説」

Ching May-bo（程美宝）“Does Sixth Aunt have an alternative?-women and marriage in the late Qing and early Republican Cantonese ballads”

Chan Wing-hoi（陳永海）“Locating women's voice: Chinese bridal songs in its social context”

○セッション５　拡展的空間：在辺縁的活力（Expanded space: thriving at the “fringes”）

Carl Smith “Abandoned into prosperity: women on the fringe of expatriate society”

Elizabeth Sinn（冼玉儀）“The women traffic in the 19th century: women as traders and women as commodities—a paper based

on the testimonial at the Pok Leung Kuk archives"

○セッション6　農民的女児・商人的女児（Farmers' daughters, merchants' daughters）

蔡志祥「超越家庭：十九世紀晩期及二十世紀初期的南中国婦女」

Maria Tam（譚少薇）"Transplanted identities: women migrant workers in Shekou"

Helen Siu（蕭鳳霞）"Charming power: women professionals in Hong Kong"

★8月10日

○セッション7 在外国制度下的華商（Chinese merchants under the foreign systems）

Chung Po-yin（鍾宝賢）"The transplantation of British company law to Chinese Hong Kong"

Raj Brown "Chinese merchants under the foreign law: rice merchants in Thailand"

May Wong（王美玲）"The strategic alliance of Wing On and Seiyu"

○セッション8　地方認同的再造（Planting local identity）

梁洪生「江西呉城鎮的商人会館与聶公崇拝」

蔣竹山「一九三〇年代天津獨流鎮商人的宗教与社会活動参与－以「在理教」為例」

○セッション9　商人与地方整合（Merchants and local integration）

陳春声「商人廟宇与商業市鎮的整合：樟林火帝廟的研究」

鄭振満「郷鎮商人会館与地域関係：涵江天后廟研究」

○セッション10　商人的形象（Images of merchants）

濱下武志「賑簿裡呈現的広東商人的歴史像」

楊応正「知識分子企業領袖的核心価値・社会参与及文化使命－従新加坡両代華裔企業人個案作初歩調査・比較与省思」

以下，順を追って報告内容を簡単に紹介したい（英文タイトルのものは中国語訳を用いる）。

◇セッション1　創造生意（Creating Business）

黎志剛氏の「香山商人的投機伝統」は，中国経済の近代化過程において香山（現，中山）県出身の商人が果たした役割に注目し，彼らの冒険心や独創的企業家精神を検討したもの。具体的には，香山県出身のオーストラリア華僑が香港や上海などに商業展開した先施・永安・大新・新新など四大百貨公司などが取り上げられた。廖迪生「商業社区：香港新界一移民社区的建立」は，1940年代後半以後に中国の東莞県沙井からの移民（ほとんどが牡蠣を採ることを生業とする「蠔民」）が新界元朗深湾に形成した流浮山という移民集落を扱う。彼らは，近くで勢力を誇っていた鄧姓宗族が所有する「蠔田」で「開蠔」作業を行っており，こうした分業関係が長期にわたって維持されてきた。「蠔船」は雇主(船主)と雇工から構成される生産単位であるが，事実上の合作形式で，収益は雇主・雇工・船のそれぞれに分配されたという。伝統的合股経営に似通っており興味深い。また，雇工は雇主の束縛を受けることなく，自由に他の「蠔船」に乗り換えることができたという。麦鴻輝「一九九零年代的農民企業家和国家制度：珠江三角洲的個案」は，現代の珠江デルタ農村における民間企業の成功の要因として地方政府とのパトロンークライアント関係の存在を指摘したもの。

◇セッション2　超越郷土(Networking: beyond the local communities)

邱仲麟「清代天津商人与社会慈善」は，天津商人の慈善活動への参加過程を，清初の個人ベースから，清中期には士紳などとの共同参与となり，清末になると自主性を備えるに至り，商会成立後は慈善組織を越えた社会救済活動の中心的担い手へと発展していったものとして捉えたものである。商人による慈善活動の詳細が明らかにされたが，こうした議論は欧米に見られる「商人の成長→市民社会の成立」という枠組から脱していないように思われる。中国社会において慈善という言葉が持つ意味や慈善の本音と建前の問題などは今後の課題であろう。帆刈浩之「寧波商人的運棺網与雇傭網」は，清末上海を中継地とした寧波商人の運棺ネットワークの形成を明らかにし，その故郷寧波への運棺経路と寧波から上海までの出稼ぎ経路とが一致することを指摘したもの。また，こうした運棺ネットワークは香港を中継地として世界に広がる広東人ネットワークにも見られることを示唆した。邱澎生「商人如何成為一個団体－試論清代蘇州商幇・会館・公所的組織文化」は，明清期の会館・公所と

清末に誕生した商会とを「同郷関係」の強弱を基準として，前者から後者への「発展」過程の中に位置付けてきた従来の研究を正面から批判したもの。氏は商会にも「同郷関係」は影響を与えており，異なる社会制度下において「同郷関係」はフレキシブルに機能を果たすのだという。むしろ政府と商人団体との関係性の中に制度上の変化は現われるとする。Joseph Bosco「台湾的城鎮商業網与地方文化」は，台湾屏東県の一郷鎮における商人が商業的・政治的目的のために地域の宗教活動に経済援助を行い，それが宗教活動の復活及び地域アイデンティティー形成に大きな役割を果たしたことを明らかにした。

◇セッション３　東南亜的華僑（Chinese merchants in Southeast Asia）

Edgar Wickberg「一九四五年以来在馬尼拉的福建商人社会」は，フィリピンのマニラの福建人社会および故郷の歴史を概観したもの。東南アジアの他の福建人社会との比較がなされ，故郷からの距離の近さや５，60年代における台湾の影響などが指摘された。銭江「十七・十八世紀爪哇的福建商人与僑民社会」は，17・18世紀ジャワの閩南商人社会を描いたもの。ジャワの閩南商人社会において，バタビアの閩南商人社会が中心的役割を果たし，商業ネットワークばかりでなく，政治的ネットワークも形成されていたことを示した。

◇セッション4　南中国的女性形象：声音与緘黙（Images of women in South China: voices and silences）

David Faure「母親的形象：華南地方的婦女地位」は族譜に載せられた士大夫の筆になる，その母親の伝記を史料として用い，母親に対するイメージを分析し，生命の源というイメージは宗族の強調に，育ちの良さというイメージは社会的地位の上昇に関連することを指摘し，明代以降の社会変化とも関連づけながら議論したもの。劉志偉「女性形象的重塑：「姑嫂墳」及其伝説」は，女性の祖先の墓地が祭祀対象とされたことなど，嶺南地区における女性の地位に関する文化伝統が中原のものとは異なるものであったことを示し，士大夫の教化によって次第に「中国文化」に統合されていく過程が紹介された。程美宝「清末民初広東木魚書中的女性与婚姻」は，「木魚書」という広東語文献に現われる女性の役割を分析し，また士大夫文化と民間文化の関係にも言及した。陳永海

「婦女声音的位置：中国的婚歌及其社会脈絡」は1960年頃まで香港農村部で歌われてきた婚歌に関して分析したもの。

◇セッション５　拡展的空間：在辺縁的活力（Expanded space: thriving at the “fringes”）

Carl Smith「走入繁華：海外傭員社会辺縁的女性」は，中国沿岸都市における社会的地位の低い女性（水上居民など）が西洋人男性との婚姻などを通して，商業活動に参与するようになるなど，地位向上を図っていった事実を紹介したものである。洗玉儀「十九世紀婦女的販買：女性的商販及被売者—跟拠保良局檔案的難民口供資料」では，19世紀香港にあった娼館は多様な機能を備え，オーナーの多くが女性であり，それは構造的ビジネスとして存在していたことが述べられた。商人文化の中での女性の位置，華人ネットワークにも女性が参加していたことなどが議論された。

◇セッション６　農民的女児・商人的女児（Farmers’ daughters, merchants’ daughters）

蔡志祥「超越家庭：十九世紀晩期及二十世紀初期的南中国婦女」は，土地契約文書や商業文書を利用して南中国の女性が家庭の管理権を拡大して地域的土地管理権を持つに至ったことを述べ，潮汕地域の商人家庭の構造との関連について議論した。譚少薇「殖入的認同：蛇口的移民女工」は1988～89年に深圳経済特区のなかの一地区蛇口における女工への聞取り調査にもとづくもの。蕭鳳霞「魅力：香港的専業婦女」は香港社会での女性の活躍を華南地域文化の歴史的展開の「主流」の中に位置付けることを提唱する。大陸との結びつきが強まるにつれて，これが変化していることも指摘している。

◇セッション７　在外国制度下的華商（Chinese merchants under the foreign systems）

鍾宝賢「英国公司法在香港的華人社会中的植根」は，異なる社会における富の蓄積やその許容範囲のあり方という問題意識にもとづいて，香港でどのような中国商がイギリスの会社として登録され，その保護を受けようとしたのかという問題を提起した。結局，広東政府を支援し，そこからの特権を享受して商業発展を図っていた商人がイギリス会社法を利用しようとしたという。財の捉え方の違いにもとづく異文化間摩擦，

そして違いの利用という興味深い問題である。Raj Brown「東南亜米業及華商網絡」は，1870～1941年における中国商人によるタイの米業及び商業ネットワークを論じたもの。王美玲「永安和西友的策略性聯合的発展」は香港で有名な同族経営の百貨店である永安が日本の大手スーパー西友と提携するに至った背景を分析したもの。

◇セッション8　地方認同的再造（Planting local identity）

梁洪生「江西呉城鎮的商人会館与聶公崇拝」は，清代以降，水運の便を生かして繁栄した江西省呉城鎮の商業発展と民間信仰との関係について現地調査を踏まえて報告したものである。蔣竹山「一九三〇年代天津獨流鎮商人的宗教与社会活動参与－以「在理教」為例」は，天津市静海県獨流鎮における在理教という民間宗教と商業活動の関連について紹介したもの。

◇セッション9　商人与地方整合（Merchants and local integration）

陳春声「商人廟宇与商業市鎮的整合：樟林火帝廟的研究」は，清代に重要な海上貿易港であった広東省澄海県樟林にある商業と関係の深い3つの廟（火帝廟，天后宮，風伯廟）を地域社会の変遷の中に位置付けた報告。鄭振満「郷鎮商人会館与社区整合：涵江天后宮研究」は，明代以降に興起した福建省莆田県涵江鎮において，海運商人が興安会館を組織して地域社会の権力の象徴となっていたことを現地で収集した碑刻史料に依拠しながら分析した報告。

◇セッション10　商人的形象（Images of merchants）

濱下武志「賬簿裡呈現的広東商人的歴史像」は，商業帳簿の検討を通して，商業ネットワーク，商人の地方性，経営方式などの問題を提起した。楊応正「知識分子企業領袖的核心価値・社会参与及文化使命－従新加坡両代華裔企業人個案作初歩調査・比較与省思」は，シンガポールの2人の華裔企業エリートの事例を参考にしながら，商業活動を行う知識分子がいかなる文化的使命観を持つのかといった問題を提起した。

以上，全体を通して見ると，中国（或いは中国系）商人の多様な側面が提示されたということが言える。たんに商業活動の面からのみ分析するのではなく，彼らが地域社会において参与していった様々な活動（政治・社会・宗教）に注目し，その歴史的意味を社会経済的，或いは政治的背景の中で捉えようとするものが多いことがわかる。また，政治の大

舞台で活躍した資本家ではなく，より地域社会に深く結びついた商人の活動に焦点が合わせられているのである。従来とくに歴史研究において，商人の存在は，①その時々の政治状況への対応如何，或いは②商行為の道徳性，③資本主義発展の段階，などの観点から歴史的評価が下されてきたと思われる。これらのうち，①と②は大雑把に言えば，「官」や「士大夫」からの観点であり，③は西洋近代から借りた物差しである。すなわち，商人はいずれの理論においても，あるべき姿が課せられ，それが前提とされた上で，議論されてきたと言えよう。これに対し，この会議での報告は商人を「主体」的存在として捉え，商人自身の動機に引き付けて，その活動を地域社会の文脈において考えようとする姿勢が顕著であったように思われる。

さらに，華南文化の独自性を意識したものが目に付いた。「不落家」などに見られる女性の社会的地位の問題や宗族の果たす役割の大きさ，さらに海外に広がる商業ネットワークの存在など，華南の地域性が大前提として意識された上で議論が展開されているのである。

最後の総括討論において，そもそも「商人」「文化」「ネットワーク」という言葉の定義は何か，という問題が出された。いずれも重要なテーマではあるが，早急な定義付けはその言葉が持つ豊富な視点を切り捨てることにもなりかねないという意見が参加者多数の賛同を得た。思うに，これらの問題は，中国全体を包括する議論としても参照可能であろうが，むしろ地域研究においてこそ，豊かな社会像を描く上で有効な視点であるように思う。

2．莆田・澄海への旅

会議終了後，1週間のワークショップが実施された。以下にその概略を紹介したい。

8月11日：香港から南方航空にて厦門へ向かう。途中合流者を含めて総勢約30名の参観団である。厦門からはバスに乗り換え，一路莆田へと北上した。車中でカナダのMcGill大学 のKenneth Dean氏[3]から当地の社会状況の話を聞く。氏は現在，福建省莆田県・仙游県一帯の民間信仰を厦門大学の鄭振満氏とともに調査しているとのことである（すでに膨

大な量の碑文史料などを収集している)。途中，同安・南安を通過するが，ここ福建南部特有の一面赤土の景色が車窓に広がる。狭い耕地面積に加えて，山間部のほとんどが花崗岩という厳しい自然条件がすぐに知らされ，南洋への出稼ぎ移民が絶えなかったのも頷ける。以前はこれといった産業もなく，米の二期作，宋代からの陶磁器生産，龍眼や荔枝などの果実生産が有名である。現在は，バスの中からも観察できるのであるが，石材・赤煉瓦の生産が盛んである。商品の多くが台湾や日本へと輸出されているという。とくに南安一帯は家内工業的な規模から比較的大きな工場までが集中し，無数の煙突から黒煙が吐き出されていた(1910年代の日本人の調査報告書にはこの地域の石材業のことは記されていないことから，比較的新しく開始されたのであろう[4])。また，同安一帯では民間信仰が盛んで，数多くの民間神が信仰されているという。さて，日も暮れてきたが，交通渋滞のためになかなか目的地に到達しない。改革開放後の経済発展に比べて，主要幹線道路の拡充といったインフラ整備が遅れているという印象である。同日夜の討論会では「莆田：民間宗教与地方文化研究」というテーマで，Kenneth Dean 氏と鄭振満氏によって興化地方の民間宗教などに関する説明がなされた。

8月12日：莆田県江口にある東嶽観を参観する。道教の泰山信仰の分鎮であり，『福莆仙東嶽観』というパンフレットによれば，宋代に淵源があるという。1986年，県の重点文物保護単位に指定された。現在の建物はシンガポール・インドネシア・マレーシア・タイ・香港などの華人からの寄付によって1989年に再建されたものである。本殿に入る所の上部に懸けられた巨大な算盤が印象的であった。次いで，東来寺，九鯉洞総鎮を訪れた。前者では仏教・道教の神が祀られており，後者は民国初期にシンガポール華僑が協力して故郷に設立した廟だという。九鯉洞総鎮の近くの広場には芝居の舞台がセットされており，堂内では劇団員が「田公元師」という守護神を祀る準備を進めていた。この辺りは地元の劇団が巡回しており，地方劇が盛んなのである。さらに，黄氏宗祠，黄氏大宗祠を訪問。後者の近くには唐代に湖南から移ってきたという第一代黄岸の墓がある。そこから，第六代で明代の人である黄璞故居へ向かう。宗族の宗教施設は宗祠であるが，ここでは土地廟の要素が混在しており，元宵節には道士を招いて宴会が行われるという。晩の討論会は

「士大夫与地方文化創造」というテーマで，当地では宋代に士大夫が多数存在し地方文化を豊富なものにしたことや多くの地方劇団が莆田にはあることなどが議論された。

8月13日：船にて湄州島へ向かう。そこには航海の安全を守る海上女神として現在も広く福建・広東出身の人々から信仰を集めている媽祖を祀った媽祖廟（天后宮）の総本山がある。とくに最近は台湾からの観光客が多いという。そのためか，莆田から半島の先端に至る道路は見事に整備されていたし，湄州島全体を「旅游特区」として開発しようという計画案の大きな看板が港の目立つ箇所に建てられていた。廟は山の傾斜地を利用して造られている。中腹にある朝天閣内の正面には「康熙二十二年祖廟分霊鹿港天后宮媽祖宝像」というキャプションが付けられた写真が掲げられていた（写真1）。そして，朝天閣の傍らにはその重建を記念して台湾鹿港天后宮管理委員会によって立てられた1990年の石碑があった。鹿港は清代中期に「一府二鹿三艋舺」とまで言われ，大陸との貿易で繁栄した台湾中西部の港である。明末，鹿港への最初の漢人移民は福建の興化府（莆田・仙游）から来たといわれているから，両地の関係は深い。鹿港には現在三つの媽祖廟が残っているが，最も古いものは「興安宮」といい，これは「興」化人の平「安」を願って命名されたものだという[5]。

さて，湄州島の媽祖廟の山頂には巨大な媽祖像が立っており，参観者は必ずここで記念撮影をしていく。売店の人によれば，媽祖は対岸台湾の方角を眺めているという。再び，莆田にもどり，三一教の廟を訪問。三一教は明代万暦年間に林兆恩によって形成された，儒・仏・道の教義を融合した民間宗教である[6]。知識分子の学術団体から発展してできた宗教組織だけあって，現世利益を求める傾向の強い中国の民間宗教の中にあって，ここには厳かな雰囲気が漂っていたように思われる。最近できたと思われる真新しい門には，マレーシアの興安会館からの捐助が記録されていた（三一教は台湾や東南アジアの華人社会にも普及しているとのことである)。晩の討論会は「祠堂与地方社会」というテーマで議論がなされた。

8月14日：泉州へ移動し，海外交易史博物館を参観した。清朝に入貢していた琉球国との盛んな往来を彷彿とさせる「道光十一年琉球僑民墓

碑」や帆船の模型などが展示されていた。次に，泉州天后宮を訪れる。小冊子『泉州天后宮』（1990年）によれば，泉州の天后宮は宋代の創建になり，1984年から修復が開始され，1987年には国家重点文物保護単位に指定されている。ここ泉州にも台湾との交易の足跡を見ることができる。道光17年鋳造の「鹿港郊」四十六商店による鉄鐘や「泉鹿同源」という扁額が現在も残されている。清朝の海禁が緩和され，1784年に鹿港と泉州の間の貿易が正式に許可されてから，多数の移民が鹿港に流入し，鹿港の人口の８割が泉州人によって占められていたという。その日の内に泉州を後にして一路厦門へと向かい，厦門大学に宿泊する。晩の討論会は「由帆船貿易到近代企業」というテーマで，中国の商店や企業における家族の関係，合股など経営の問題などが討論された。

８月15日：厦門からは再びバスに揺られ，一日がかりで広東省澄海（最近，県から市へと昇格）へと行く[7]。澄海は広東省の東南部，西北に潮州に接し，西南では汕頭に接する沿海平原地域で，人口密度は全国屈指で潮州語が話されている。私たちは澄海華僑大厦に投宿。同夜，澄城鎮政府の副主任の方から，翌日訪れる隆都鎮前美郷の概況を伺う。澄海は著名な僑郷の一つであり，すでに清代中期より東南アジア（とくにタイ）との海上貿易が発達して多くの移民が往来しており，19世紀中期以降は出稼ぎのため大量の移民が出国した。1987年の調査では，澄海全県の「在外僑胞」は559, 888人（香港・マカオを含み，国内に「僑眷」がいない者や第三世以後は含まない）おり，全県総人口の82.5％を占め，全県の「僑眷」総人数の1.44倍だという。また，隆都鎮では人口の70％以上が「僑眷」であり，「在外僑胞」は103, 872人で，その約90％にあたる93, 615人がタイ在住である（『澄海県志』1992年）。タイとの関係がいかに密接であったかが窺えよう。

８月16日：我々が訪問した隆都鎮は海抜３～５ｍの低地が広がり，あちらこちらに溜池があり，水稲・落花生・甘藷・荔枝などが栽培されている。ここは同姓村であり，清末から多数の移民をタイへ送り出していることは前に述べた。まず，隆都鎮帰国華僑聯合会を訪問する。応接室にはタイ・香港の華僑から贈られた扁額が飾られていた。そして，総合市場を参観後，朱氏宗祠，そして陳氏家廟を見学する。堂内の天井にはどこでも龍舟が吊られていたが，聞くところ，かつて民国期には五月

写真１

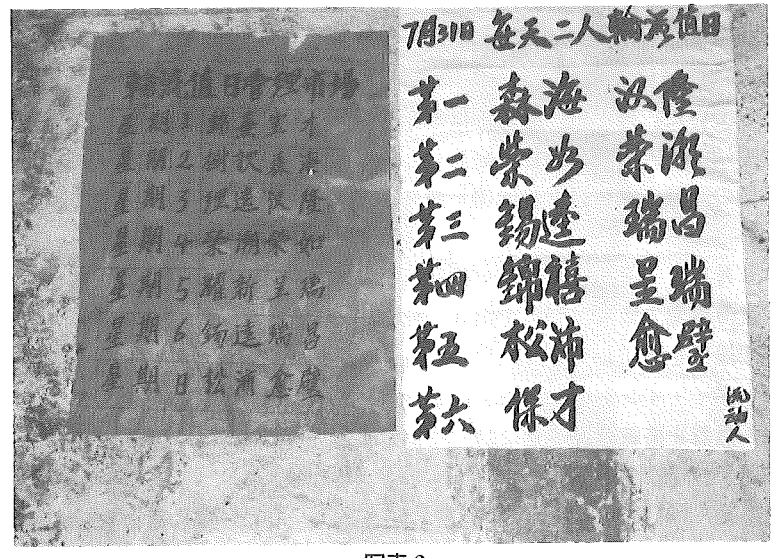

写真２

の端午節の際，朱氏，陳氏ともに参加して盛大にボートレースが行われていたという。しかし，今は資金がないのでやらなくなったという。陳氏家廟の通路の壁に当番表が2枚掲示されていた。1枚は市場管理の任にあたる当番表であった。同姓村での日常生活上の決めごとが廟において集約されている一つの姿であるように思われる（写真2）。

次いで前美郷にある陳慈黌（1843～1921）の邸宅を訪問する。陳慈黌は清末期にタイへ移民し，1871年バンコクに米穀輸出商の陳黌利行を創業（親会社は香港の輸出入商社である乾泰隆－1851年創立）。後に業務を拡大し莫大な財産を築いて帰郷，1903年から25,400 m^2 の敷地に4棟約500部屋を誇る大邸宅の建築を開始し，1930年に完成した。中国・西洋の両様式を取り入れ，細部の装飾も贅を尽くしたものだが，堅固な外壁が見るものを圧倒し，見張り台も備わり，まさに城砦という印象である。現在もほぼ当時の威容を誇っている（写真3）。しかし，日本軍の侵攻によって家族はみな海外へと逃れて，以後一度も故郷へは戻っていないという。近くには，陳氏の祖先である陳廷光（康熙32年挙人）が水害や盗賊から族人を守るため，1732年に創建した永寧寨という古跡がある。年月が経って破壊が進んでいるが，こちらも高い塀（三面は8m，一面は4m）に囲われた城砦の如くである。官僚や土匪などによる搾取や強奪といった人災は時として天災よりも激しかったのかも知れない。陳家は四房に分かれており，陳慈黌は長房に属して居美古廟で祭祀を行っていた。第三房・第四房はともに祠堂を持たないという。晩の討論会では「商人的商業及社会網絡」という題で，移民の背景，商人の遺産相続の問題，家族経営の問題，商業ネットワークの問題などが議論された。

8月17日：澄海市東里鎮の樟林へと向かう。ここは清代乾嘉年間に遠洋航海事業で繁栄した港であり，樟林港の「紅頭船」は船団を組み，毎年季節風を利用して北は蘇州・上海・寧波・青島・天津，南は瓊州・安南・タイ・インドネシアなどにまで達した。北上する船の多くは砂糖や茶・磁器を搭載し，帰りは綿花や薬材などを持ち帰った。また，タイからは米を運搬するなど，中継貿易の重要な港であった。しかし，汕頭の開港後，「紅頭船」の地位は輪船に取って代わられ，港の機能は国内航運に限られるようになったという。さて，我々はまず樟東僑聯を表敬訪

写真3

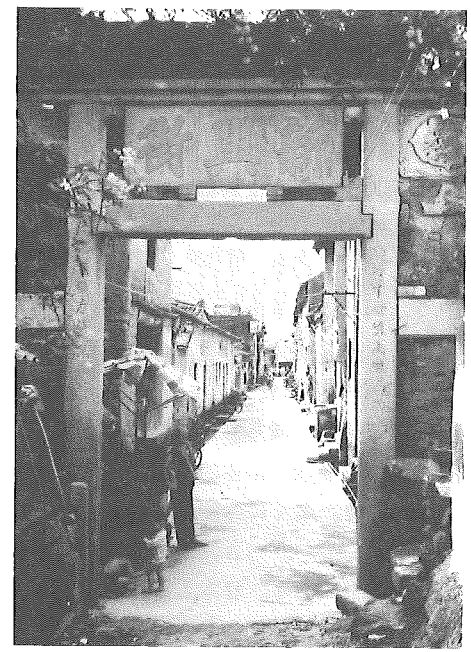

写真4

問し，国王廟・火帝廟・感天大帝廟・天后宮を見学した後，かつて貿易が行われていた新興街に行く（写真４）。港に面した所に「貨棧」が立ち並び，それぞれに小さな埠頭が造られていたという。

晩の討論会は樟林の歴史をめぐる問題が議論された後，歴史学と人類学との関係という方法論にかかわる問題で議論が沸騰した（とくに香港・台湾からの若い研究者が熱っぽい議論を行った）。私自身，今回の見学旅行で，香港あるいは中国の華南研究者がフィールドワークを行う際に，何に注目してどのように議論を組み立てるのか，ということに関心を抱いていた。しかし，現地調査を行うといっても碑刻史料の収集が主であり，方法論的には歴史学である場合がままある。最終的には研究者が持つ本来のディシプリンに戻っていくようである。結局のところ，事実の掘り起し作業においては厳格さが必要ではあるが，その事実をいかに認識するかというレベルでは柔軟な思考が要求されているように思う。討論では細かな事実確認ではなく，問題意識を相互にぶつけあうことに意味がある。彼らに負けぬよう，自身の認識を鍛えておく必要性を感じた。

おわりに

こうして，約１週間の見学旅行は無事に18日の解散をもって終了した。今回のワークショップを通じて，文献や論文では十分に表現されないであろう現場の雰囲気というものを，その一部分ではあるが体感することができたように思う。例えば，華南には実に多様な民間信仰が存在していたこと，宗祠や族田など「団体的所有」のあり方，直接目には見えないが宗祠や寺の重建の際の捐款者リストを通して知ることのできる華僑・華人の存在，同姓村集落に満ちている濃密な空気など，が挙げられる。こうした問題はやはり地域の全体的構造の中で歴史的に位置付けて理解していく必要があろう。とくに今回強く感じたのは，中国の商業文化，あるいは商業民俗とでもいうべき問題についての研究が日本ではあまりにも少ないということである。日本人自身が有する「農本主義」志向と研究史上に根強い「中国農民革命」史観とによって，地域の商業活動が軽視される傾向を生んできたように思われる。中国商人がそれぞれ

の地域において，またはある歴史的局面で自発的に行ってきた宗教活動や慈善事業などを「士」や「農」の文化との関係において分析する他に，それ自身が独自性をもち，ゆるやかに変化していく商業民俗として捉え，過去に遡って長期的に考察することは意味あることであろう。

註

1） 華南地域社会研討会『華南研究』第１期，1994年７月，参照。なお，香港や中国における人類学研究については，Chien Chiao（喬健），Development of Anthropology in China and Hong Kong: A Personal and Casual Review, *The Hong Kong Anthropologist*, no. 7, 1994. が簡潔に紹介を行っている。日本では，西澤治彦「漢族研究の歩み－中国本土台湾・香港」と瀬川昌久「宗族研究と香港新界－中小宗族からの展望」（ともに『文化人類学』５，1988年）が参考になる。最近の成果としては，可児弘明編『シンポジウム華南－華僑・華人の故郷』，慶応大学地域研究センター，1992年，がある。

2） 以下の紹介は，会議で配布された「Project Description」などを参照にした。

3） 著書に，*Taoist Ritual and Popular Religion in Southeastern China*, Princeton, Princeton University Press, 1993. がある。

4） 台湾総督府官房調査課『南閩事情』1919年，など。

5） 荘展鵬主編『鹿港』台湾深度旅游手冊７，遠流出版公司，1992年。

6） 馬西沙・韓秉方『中国民間宗教史』上海人民出版社，1992年。

7） 澄海に関しては以下の文献を参考。澄海県地方志編纂委員会『澄海県志』広東人民出版社，1992年。陳作暢「前美永寧寨」『澄海史志』1993年１期。李紹雄『樟林滄桑録』政協澄海委員会東里鎮聯絡組ほか，1990年。

［付記］会議及び本稿の執筆にあたっては香港科技大学の蔡志祥・廖迪生の両氏に大変お世話になった。ここに記して謝意を表したい。